

大阪南部に残る泊園書院藤澤南岳・ 黄鵠・黄坡の揮毫と碑文

——中河内郡惠我村別所の中山家資料を中心に——

西田 孝司（松原市文化財保護審議会委員）

一. はじめに

江戸時代後半、大坂には懷徳堂と泊園書院という有名な漢学塾があった。このうち、泊園書院は文政八年（一八二五）、讃岐（香川県）出身の藤澤東咳が大坂に出て、淡路町（現中央区）に塾を開いたものである。皇室崇拝の心が厚かった東咳が元治元年（一八六四）に亡くなった後、長男南岳がしばらくとだえていた泊園書院を明治六年（一八七三）に再興した。南岳の名声は各地に広まり、門下数千人といわれた。大阪のみならず、各地の教学に貢献したのである。南岳が亡くなった大正九年（一九二〇）以後は、長男黄鵠、次男黄坡がその学統を継いだ。昭和二十四年（一九四九）黄坡の死とともに泊園書院は終止符を打った。小文は、この南岳をはじめ、黄鵠・黄坡が、大阪府中河内郡惠我村別所（現松原市別所）の中山家や隣村の三宅村（現松原市三宅）の辻家と関わった事例を、中山家資料を中心に紹介し、地方の名望家と泊園書院の結びつきの一端に触れるものである。

別所や三宅近辺では、南河内郡道明寺村（現藤井寺市道明寺）の土師神社（現道明寺天満宮）社司の南坊城良興が泊園書院の塾生であったこともあって、同社に泊園書院の孔子像を移し、明治三十六年（一九〇三）か

ら、今に至るまで儒教において孔子を祀る積奠を行っていることはよく知られている。また、道明寺にほど近い南河内郡藤井寺村岡（現藤井寺市岡）の素封家で文人、岡田正英（松窓、寿一郎）¹⁾が、明治時代以降、南岳・黄鵠・黄坡と親交を結んでいたことも事実である。そればかりか、積奠を道明寺に導入したのも正英の功績が大きかったことも知っておくべきであろう。

南岳は、菅原道真を祭神とする土師神社（道明寺天満宮）参道に建てられているメ石に明治四十五年（一九一二）五月、「神化肅雍百世仰敬」「玄德明美萬邦致尊親」と揮毫しているように、筆徳の神、道真や天満宮に尊崇の念を持っていた。

現在、道明寺天満宮の南側にある宗善寺墓地（浄土宗）には南坊城家代々の奥津城が祀られているが、昭和十五年（一九四〇）に亡くなった良興墓の隣に、明治時代前半の道明寺二之室院主であった藤原章子の墓がみられる。同墓は、良興が建てたものである。そこには明治二十一年（一八八八）六月に南岳が撰および書をなした碑文が残り、明治初年の道明寺と土師神社との神仏分離の消息などが記されている。

眼を対岸の大和川の北に移しても、南岳は、大和川と石川合流点の志紀郡柏原村（現柏原市）の築留二番樋に、同じく明治二十一年に当時の志紀郡などの郡長であった深瀬氏を讃えた碑文を書いている（「深瀬和直郡長頌徳碑」）。ここから北西に行った中河内郡龍華村植松（現八尾市植松町）の植松共同墓地（現八尾市相生町）には、明治三十年（一八九七）十二月に亡くなった当地の医者（曲直瀬道三の裔と伝える）であった長崎伊左衛門（桂齋）の墓（「桂齋長崎先生墓」）にも南岳は碑文を記している（ただし、今では、碑文ははがれ失われている）。

また、植松共同墓地から東北にあたる同郡中高安村万願寺（現八尾市東山本町）の名望家であった久保田真吾が服部川（山畑川）を改修した明治四十年（一九〇七）の碑でも、二十年來の親交をもつ南岳が書を残している。

さらに、南岳は大正三年（一九一四）八月、南河内郡植生村伊賀（現羽曳野市伊賀）の庄屋で、治水事業を天保四年（一八三三）に行った今西藤

右衛門の遺徳を讃え「今西翁頌徳碑」を撰している。その書は先述の岡田正英である。

南岳死後、黄鵠は大正九年（一九二〇）三月、「今西翁頌徳碑」の西隣にあたる埴生村向野（現羽曳野市向野）の庄屋であった山上宗近が灌漑用水確保のため、寛永年間（一六二四〜四三）に二度池を完成させたことを讃えた「山上宗近流沢碑」を撰している。

黄鵠死後も、大正十五年（一九二六）八月、黄坡は古刹葛井寺の向かいにある藤井寺村岡の辛国神社（岡田正英らの氏神）に建てられた田中徳次郎翁頌徳碑に撰と書をなした。田中は現在の近鉄南大阪線の誘致に尽力した人物であり、正英が碑文を黄坡に依頼したのである。正英は二年後の昭和二年（一九二七）、六十四歳で亡くなっている。正英墓は、辛国神社南側の藤井寺共同墓地に現存し、黄坡がその墓石の碑文を記したのである（「正窓居士墓」）。

このように、大阪中南部に南岳を中心とする泊園書院との結びつきがみられるのは、東咳が幕末、同地方と生活圏を持つ平野郷（現大阪府平野区）の学塾であった含翠堂に出講していたことや、南岳も幕末ごろから南河内で活動していた漢詩結社の白鷗吟社に唯一、地域外の大坂から参加していた（安政四年、十六歳のころ以降）ことなどから、この地の素封家・名望家などと繋がりを持ったことは当然、推察されるところである。

南岳と岡田正英や久保田真吾などとの親交はいうまでもなく、塾生としても道明寺の南坊城良興ばかりか、幕末以降、中河内郡長吉村川辺（現大阪府平野区川辺）の竹嶋氏や、南河内郡太田村（現八尾市太田）の桑野氏、同郡小山村津堂（現藤井寺市津堂）の石田氏などの名もあげられる。

以上のような事例の一部については、すでに『藤井寺市史』（各説編・二〇〇〇年、および第二巻通史編二、二〇〇二年）、『羽曳野市史』（第七巻・史料編五、一九九四年）、あるいは藪田貫「植田家の人々と学芸」（『八尾安中新田植田家の文化遺産』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究会センター編、二〇〇七年）などに記述されてきた。しかし、今回、小文で紹介する現松原地域の泊園書院関係の碑文や揮毫は、ほとんど公開されてこなかった。

これらの資料は、私も執筆させていただいた『松原市史』第二巻・本文編二（二〇〇八年）編纂の過程で調査したのだが、その中間報告を二〇〇七年六月二十八日、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究会センターで「大阪南部に残る泊園書院藤澤南岳・黄鵠の揮毫と碑文―中河内郡恵我村別所の中山家資料を中心に―」と題して発表する機会に恵まれた（二〇〇七年度第一回、歴史資料遺産・学芸遺産研究会―大阪の碑文・拓本と学芸―）。藪田氏から、それらをまとめるようにとの依頼をうけたので、当日のレジュメをもとに、その後の文献・金石文調査などによる知見も若干得たので以下に述べていくことにする。

二・恵我村別所の中山家

図1は、明治四十一年測図・大正元年九月発行の参謀本部陸地測量部による二分の一の別所・三宅を含む位置図である（「金田村」がタイトル）。宝永三年（一七〇六）に付け替えられた大和川左岸に隣り合わせて集落がみられる。道明寺は、ここから南東に約四キロほどの距離である。

この時代、鉄道（現近鉄南大阪線）はまだ開通していない。このため、南岳が大阪・淡路町の泊園書院から、同地を訪れるには上町台地を熊野街道・中高野街道を南下し、四天王寺から平野を経て、大和川に架かる高野大橋を渡ったことであろう。平野から三宅までは、南に約四キロを測る。道明寺には、さらに三宅を通り阿保・阿保茶屋（以上、現松原市）から長尾街道を東に向かったか、このまま、中高野街道を上田・新堂・岡（以上、現松原市）を南下し、岡から竹内街道を東進したと思われる。

幕末、南岳が参加した白鷗吟社は、竹内街道沿いの丹南郡野村（のち、南河内郡。現羽曳野市野）の平田竹軒が中心となって興じたもので、平田家が催されたのであった。また、南岳らが古くから親交した岡田正英の地元、岡村も土師神社が鎮座する道明寺村も、いずれも古代以来の幹道といわれ、南北一、九キロ間隔で東西に走る長尾街道や竹内街道エリアに位置していたのである。

泊園書院があった現大阪市内や、藤澤家の出身地である讃岐（香川県）

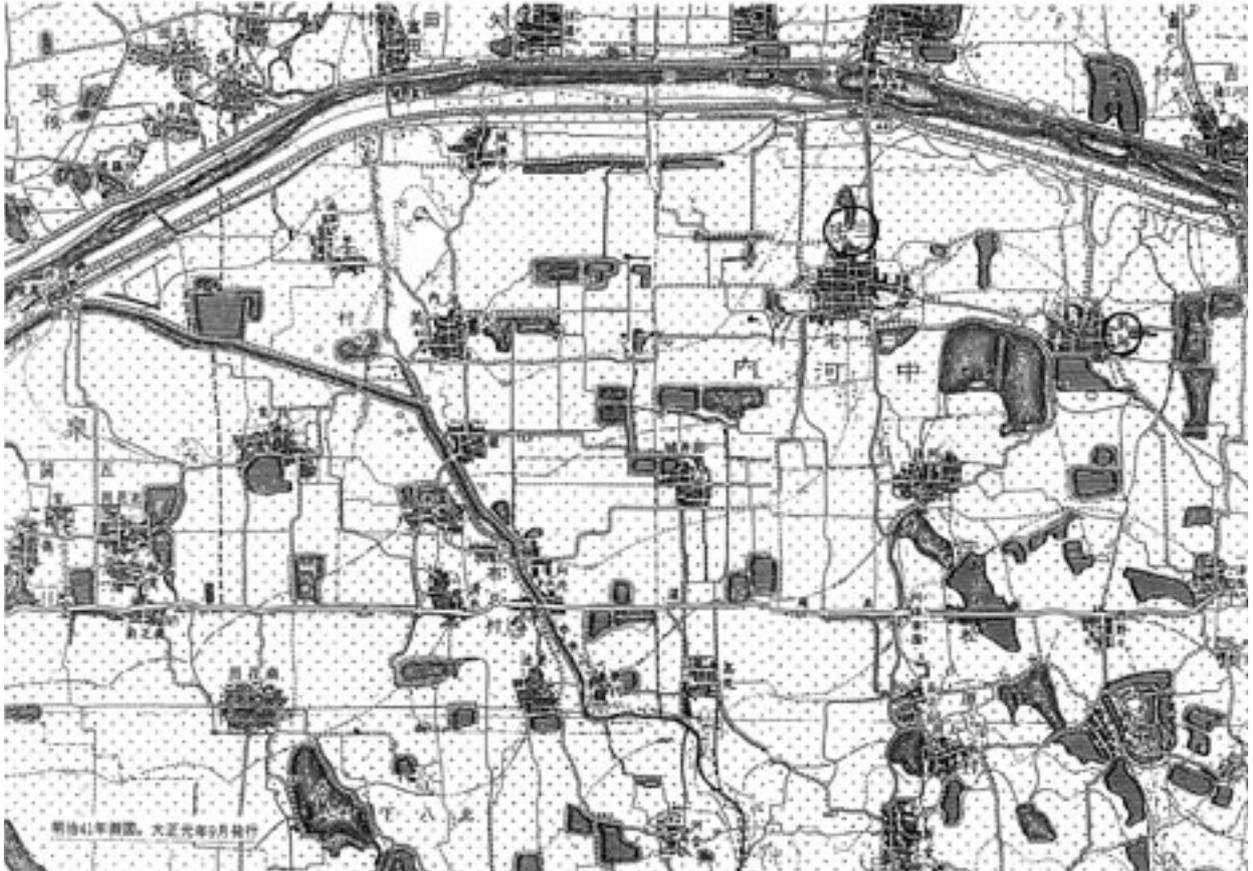


図1 明治末期～大正初期の別所と三宅



図2 中山家住宅外観
(南面する長屋門から主屋を望む)

の香川郡安原村の地元塩江町（現高松市）に南岳らの碑文や揮毫がかなり残っているのはいうまでもないが、この南河内・中河内地域にまともしているのもゆえなことではない。

そこで、別所の中山家²について触れる。現在、別所六丁目の熱田神社の東側に中山経正氏宅がある。中山家は、江戸時代に丹北郡別所村の庄屋や八上郡の大庄屋をつとめていた。

別所村は、はじめ幕府領だったが、宝永二年（一七〇五）から関東の大名であった秋元家の領地となった。秋元氏は河内国の丹北・丹南・八上の三郡四十三カ村を支配しており、八上郡長曾根村（現堺市）に陣屋を置いていた。時期によって異なるが、三郡にはそれぞれ大庄屋が任命されており、幕末ごろはだいたい三宅村から現堺市域の八上郡を中山氏が、堺市や羽曳野市域の丹南郡を日置氏（丹南郡西村、堺市）が、恵我村などの松原市域や八尾市・大阪市・羽曳野市域の丹北郡を吉村氏（丹北郡島泉村、羽曳野市）が見ていた。

中山家には寛政十一年（一七九九）正月の日付をもつ「子孫永慶弔誌薄」が伝えられている。それによると、現在の中山家の主屋は文化二年（一八〇五）に建てられ、奥座敷は天保元年（一八三〇）に増築されたところである。主屋は桁行十九間半、梁行五間の六間取りである。他にも、湯殿・寝部屋・寮・蔵・長屋門・裏門・長屋・堀など、近世後半の富裕な家柄にふさわしい建物がほぼそのままでも残っている。このため、平成十六年一月、中山家住宅は国の登録有形文化財に指定された（図2）。

(表紙)

明治三拾五年拾弐月

諸事控日記

第拾参番帳

明治三十七年五月七日

一主人三宅猶太郎氏宅へ大坂藤澤先生御越しニ付被参候

明治三十七年九月十一日

一主人桑津日下へ藤澤南岳門人会ニ被参候

明治三十七年十一月二日

一主人大坂へ被参候、藤澤へ印形受外買物

図5 諸事控日記① (中山家蔵)

を受けていた。地元の三宅尋常小学校から三宅高等小学校を卒業後、同じく南岳に師事していた三宅村の辻直太郎の影響も受け、泊園書院寄宿舎に入ったのである。しかし、父善治は明治二十四年(一八九一)、五十三歳で亡くなったので、潔は十一歳で中山家当主となった。

図4は、中山家が所蔵する明治三十六年(一九〇三)に撮影された泊園書院関係者と思われる集合写真である。場所は不明だが、昭和二十五年(一九五〇)、七十一歳で亡くなった潔が生前、アルバムに自筆した人名によると、前列左から多治見秀穂、藤本煙津、藤澤黄鶴、藤澤南岳、中山潔である。黄鶴の前で座布団に座っているのが水野富三郎。二列目左から木村森蔵、その右が辻直太郎、林幸太郎。他にも杉本、西尾などの姓も確認できるが、名は文字がかすれて今では判読できない。後列唯一の女性のうち、中山家と深く交わるようになる吉宗耕英である。この時、南岳は天保十三年(一八四二)生まれの六十一歳。黄鶴は明治七年(一八七四)生まれで二十九歳。中山潔は二十三歳。辻直太郎は元治元年(一八六四)生まれで三十九歳であった。明治九年生まれである黄坡は入っていない。

潔は、南岳の右隣に座っている。結婚前(潔は明治三十九年、中河内郡

大戸村(現東大阪市石切)の、後に衆議院議員となった岩崎安治郎の娘、次子と結婚する)の青年が上席に位置していることは注目される。潔は、アルバムのメモに南岳と黄鶴をそれぞれ先生と敬称をつけている。他の人物は氏とするが、最前列に一人だけ水野富三郎が座布団に座っているの、この撮影場所は水野宅か、あるいは水野主催または主賓の可能性があるだろう。

図5は中山家に残る「諸事控日記」である。表紙に「明治三拾五年拾弐月」「第拾参番帳」とあり、中山家で起こった出来事を年月順にまとめている。中山家に入入りしていた、同じ別所の農民で番頭の任に当たっていた松本重太郎がおもに書いたものである。ここから、泊園書院・南岳関係を拾うと、わずかだが、潔の結婚前の明治三十七年(一九〇四)の三件が取り出せる。前掲写真の一年後のことである。

一つは、五月七日、三宅の辻直太郎宅へ南岳が来たので、主人(潔)が直太郎宅を訪れたことを記す。歩いて十分ほどである。辻家や直太郎については後述するが、潔より十六歳ほど年長であった直太郎は、三宅村の庄屋を務めた家に生まれ、近郷の有力者などと広く交わり、潔に大きな影響を与えた人物である。二つは、九月十一日、潔が桑津(現大阪市東住吉区桑津)の日下氏宅で行われた「藤澤南岳門人会」に参加したことを記す。十一月二日には、潔は大阪へ出て、南岳の印形を受け、また買い物もしたという。

図6は、同じく明治四十年(一九〇七)ごろの「十二月廿九日ヨリ」「大正貳年九月廿九日迄」の「諸事控日記」で、「第拾六番帳」とある。開始年代が破れているのは残念だが、ここには四件の南岳関係が記されている。まず、明治四十四年(一九一〇)十一月二十八日付けで、潔が大阪で南岳と打ち合わせをしたという。内容は伝わらないが、南岳は潔を塾生の中でも期待した一人であったことは想像できる。翌四十五年一月九日に、潔は南岳へ年始挨拶に訪れている。その一週間後の十六日、泊園書院が所在する淡路町にほど近い難波新地一丁目あたりから出火し、千日前へと延焼したミナミの大火があった。早速、潔は翌十七日に番頭の松本重太郎を南岳のもとに伺わせ、近火見舞いをしている。大正へと年号が変わった大

(表紙)

明治〔破レ〕十二月廿九日ヨリ

諸事控日記

大正式年九月廿九日迄 第拾六番帳

明治四十四年十一月二十八日

一主人大坂へ被参候、南岳先生ニ打合之事にて

明治四十五年一月九日

一主人大坂藤澤先生へ年礼ニ被参候

明治四十五年一月十七日

一重太郎藤澤先生へ近火見舞ニ行、外小用兼

大正二年四月六日

一主人藤澤先生ノ父五拾回忌管候ニ付、参詣被到候

正二年（一九一三）四月六日、藤澤家の菩提寺である大阪・生玉（現大阪市天王寺区）の齡延寺で行われた南岳の父、東咳の五十回忌法要に潔は参列している。東咳は、辻直太郎が生まれた幕末の元治元年に七十一歳で亡くなっている。

「諸事控日記」は、他にもあるはずだが、今のところ、この二冊のみがわかっているだけである。何冊あったかは明らかでないが、後述のように明治三十一年（一八九八）以降、潔は自筆の「心覚」や「日記」を大学ノートに書き綴っている。大正二年までの十六冊で終わったかもしれない。「諸事控日記」は備忘録の性格を持つものであり、詳細な内容は記さないが、泊園書院・南岳と河内の地主であり、塾生であった人物との関わりに触れることのできる生の資料といえるだろう。

図6 諸事控日記②（中山家蔵）

四・辻直太郎の人となり

一方、辻家過去帳によると、直太郎は丹北郡三宅村の庄屋であった彦太郎の次男として、元治元年（一八六四）に生まれた。長じて、学を南岳に学ぶと共に、剣道を誉田八幡宮（現羽曳野市誉田）社司の桃井直正（幕末、千葉周作・斎藤弥九郎と共に三劍士といわれた）に師事した。直正は勤王の志が強く、近隣の青年有志に剣道だけでなく、漢籍や書道も伝授するなど、郷土文化の発展にも寄与した。明治十一年（一八七八）五月、現南河内郡千早赤阪村水分の楠木正成生誕伝承地に「楠公誕生地」の碑文を書き、現存している。現在、中山家にも明治十四年（一八八一）仲春に、潔の父善治に為書きした直正の書「寿福」が伝わっている。

直太郎はのち、三宅村村長となり、地域行政に貢献する。また、近隣各村の有力者と交わり、とくに、道明寺村大井（現藤井寺市大井）の庄屋であった白江家（註）に姉の志ゆんが嫁いでいたことから、明治三十年代以降、白江家後見人にもなっている。現在、大井墓地に明治三十三年（一九〇〇）二月の日付をもつ「白江太平治記念之碑」がある。太平治は、私財を投じて木樋管と掘割を作って大和川の水を北へ注水した人物である。直太郎も白江家に残る「諸事心得日記」によれば、同碑建立の幹事四人のうちの一人となっている。また、明治四十三年（一九一〇）十二月に道明寺村国府（現藤井寺市国府）の潮音寺に建てられた「衣縫孝女碑」には、先述の岡村の岡田正英が書をしたため、賛成員として、太平治の孫で、志ゆんの娘（シゲノ）婿である白江琢三らと共に直太郎も名を連ねている。直太郎は、平安時代前期の『続日本後紀』卷十に記された河内国志紀郡の孝女を讃えた潮音寺内の墓を顕彰するのに賛同したのである。

明治末期のこの時期、潮音寺は幕末期、南岳も参加していた先の白鷗吟社の例会の場ともなっていた。正英が一時とだえていた同社を復興し、主宰していたのである。正英は南岳・黄鶴・黄坡との交友の中で、詩作にふけり、「松窓詩鈔」（上下巻）や没後の「松窓遺稿」を著し、河内の文教につとめている。

なお、南岳は白江家も訪れており、中山家と同じく庭の一角に南岳ら文



図7 辻家蔵の南岳73歳の書

人が逗留できる井戸付の二階建ての建物もあったと伝えている。現在、明治四十四年（一九一〇）、南岳が「白江君」と為書きした七言絶句などが所蔵されている。

ところで直太郎の孫で、辻家現当主の辻嘉之輔氏宅に大正三年（一九一四）、南岳が七十三歳の時、直太郎の求めに応じて作った五言絶句が今も残っている。次にそれを示す（図7）。

架上古書堆 箱中奇画満

省み起坐勞 待史又惟伴

題書架作為辻君囑 七十三翁南岳

「架上古書堆し、箱中奇画満つ、

省みて起坐勞するが如し、待史又伴を惟う」

と読むのだろう。訳は

書棚には古書が高く積んである。

箱の中には珍しい絵画がぎっしりある。

考えてみると、起きなおるのにも厄介だ。

小生は、また力を貸してくれる友が欲しい。

「書架」と題して辻君の依頼に応じて、この詩を作った。七十三歳老人

南岳

でよいだろう。

この詩から考えられることは、「直太郎の家には古書が棚の上にならずたかく積み、また、箱の中には珍しい絵画がいっぱいある。省みると、あなた（直太郎）は座しているいろいろな仕事をしているのだな。私（南岳）はあなたに侍史しています。また一緒に仕事をしましょう。」という南岳の直太郎を尊敬する気持ちもあったのではないか。直太郎、この年五十五歳であった。直太郎の博覧強記ぶりを示すものであろう。そのうえ、絵画にも造詣が深く、蒐集をいとわない教養人でもあったことがわかる。

こうした南岳と直太郎との絆があったからか、翌大正四年三月十七日、直太郎の仲人で、黄鵠の長女、雅子と中山潔の弟、源次郎が別所の中山家で見合いをして結婚した。南岳にとっては、孫の喜ばしい門出であった。

この縁組については、後述の中山潔の「心覚」でも触れる。さらに、これも後述するが、直太郎は父彦太郎の墓石がつけられた明治四十五年（一九一〇）には、南岳と学を共にした通信省修技校長でありながら、趣味人ともいふべき原田隆に墓碑を依頼している。また、自身の生前墓を昭和九年（一九三四）に建てるが、その書を黄坡に託したのである。これを見とどけるように、直太郎は昭和十四年（一九三九）、七十五歳の生涯を閉じた。

五. 中山潔の「心覚」日記

現在、中山家には潔が二冊にわたった大学ノートに書き留めた明治三十一年（一八九八）一月から昭和七年（一九三二）四月までにわたる「心覚」と、昭和四年（一九二九）一月一日から同五年七月二十三日までの「日記」が残されている。その多くは、日常生活の事柄を万年筆で月日、天候（昭和時代以降）を記し、簡略にまとめている。先掲の中山家番頭松本重太郎による「諸事控日記」とは別に、当主自らが備忘録としてこまめにメモしたものである。ここでも、泊園書院関係のものを取り出してみたい（図8—1、8—2、8—3）。

（1）大正四年三月十七日：潔の弟源次郎と黄鵠（元造）の長女雅子が、辻直太郎の仲人で中山家での出会い、結婚した。源次郎は、東京・北里研究

◆心覚 中山潔（大正四年～大正十四年）

大正四年三月十七日

弟源次郎ト藤澤元蔵氏長女雅子ト結婚ス（藤澤南岳先生孫也）、中人三宅村辻直太郎氏、源次郎ハ当時旅順療病院長関東都督府技師也、当方ニテ双方出会挙式ス

大正十二年五月

阿保保田佐久三氏銅像建設ニ付寄附金津村藤太郎・北山伊三郎渡、尚建設ニ付藤澤黄鵠先生ノ撰文ノ依頼当方より致、其御礼ニ〇円藤澤氏へ持行、其後保田氏より藤澤氏へノ礼トシテ一封持来リタリ、其儘藤澤氏へ持行

大正十二年六月

分家源次郎関東都督府旅順療病院長ヲ辞職、帰国シ、大阪市天王寺大道三丁目ニテ医院開業ス、祝二百円致

大正十三年六月

南岳先生積奠ノ聯句軸、井口へ表装ヲ命ス、十円八十銭

大正十四年十一月二十三日

泊園書院開塾百年祭、難波明月楼ニテ催ス、出席ス

所に勤めていたが、結婚当時は中国大陸にあった「旅順療病院院長関東都督府技師」の要職に就いていた。いわゆる軍医で、大佐の位を得ていた。このため、雅子も中国に渡ったのである。

(2) 大正十二年五月：南岳は大正九年（一九二〇）一月、七十九歳で亡くなっており、黄鵠が泊園書院を継いでいた。後述するが、慶応二年（一八六六）、丹北郡阿保村（松原村阿保）の庄屋宅に生まれた保田佐久三が松原村村長や大阪府議会議員を務めたことから、同じ元庄屋仲間で隣村の三宅村村長でもあった辻直太郎や中山潔との結びつきが深かった。このため、潔は佐久三像を保田家邸内に製作するのに際して、その撰文を黄

図8-1 中山潔「心覚」大正4～大正14年（中山家蔵）

◆日記 昭和四年

一月七日曇

次子、孝、秀、邦、吉宗耕英女史方へ年賀初釜ニ行

三月六日晴北風寒シ 次子同道、三越・大丸・高島屋へ行

一吉宗耕英女史、不在中來訪、予テ依頼ノ絹本嵐山ノ絵一枚并ニ梶村李造氏依頼ノ唐紙黄檀ノ図一枚持参せらる、嵐山ノ絵ヲ即日上本町岡本春欣堂へ表装ニ托ス

三月九日晴暖

岡本春欣堂へ一昨日取通シニ行タル、耕英女史嵐山絵ヲ表具ニ持行

兩月十一日曇后雨寒風又雪

「※」 吉宗耕英女史へ嵐山ノ図揮毫ノ礼ニ行、金三十五円包ム、唐紙半折橙紅葉ノ図梶村李造氏

依頼ノ分共、此分ハ添物位ノモノ也

※耕英女史嵐山ノ図礼三十五円持行

朝来雨春雷 四月七日 朝来豪雨降り雷轟ク午後晴 在宅

一孝・秀、吉宗耕英女史方へ書画の入門を為す、次子同行ス

八月二十日晴むし暑シ 在宅

一吉宗耕英女史と同母、朝來訪

十一月九日

一泊園書院、吉宗耕英女史往訪ス、吉宗女史へ絵馬ヲ依頼ス、太田姉ノ依頼也

十二月廿五日晴れ

一吉宗耕英女史來訪、太田氏依頼ノ絵馬持来ル

一月七日晴、稍暖

一次子・孝・秀、耕英女史方へ年礼ニ行

鵠に依頼したのである。潔が仲介したことから、黄鵠に礼として自ら二十円を持参し、また保田家から預かった一封も届けたという。ちなみに、大正十年（一九二一）当時、大阪市公務員の給料が月八十円の時代である。

(3) 大正十二年六月：中山潔家から分家していた源次郎が藤澤雅子との結婚後、八年を経て旅順療病院長を辞職して、中国から帰国した。潔の援助も受けて、大阪市天王寺の大道三丁目で中山病院を開業したのである。この開業祝に、潔は二百円を贈っている。「心覚」によると、源次郎が天王寺に開業した理由の一つは、大正九年十月十七日に別所の本家とは別に、潔の長女孝や次女秀の勉学のため、近くの生玉町（現天王寺区）に家

図8-2 中山潔「日記」昭和4年（中山家蔵）

嵐山之図 吉宗耕英女史へ御礼三十五円絹本	昭和四、三、一一
右表装代拾七円、上本町九丁目岡本眷欣堂扱、箱共	同 四、三、三一
画入門 吉宗耕英女史へ 孝分 夜修二円 稽古毎土曜日 毎月五円/月謝	昭和四、四、一二ヨリ
書入門 同人 秀分 夜修二円 同 昭和三、四、一二ヨリ	
故藤澤元蔵氏二女礼子、近藤重治氏と結婚、再縁二付祝ナコヤ帯九円九十銭	
藤澤元蔵氏(黄鵠) 七回忌法事香代三円	昭和五、九、一四
故南岳先生印讓跋ノ謝礼、藤澤黄坡へ十円	六、四、一六
南岳先生十三回忌追薦齋延寺ニテ 拾円包	七、四、二
表具 南岳先生軸 (宇野清操詠ノ一) (沼淵路高低) (一行又同行)	
(氣兼海瀧調) 四幅シケ表具致、上本町九丁目岡本眷欣堂ニテ	
表具代四幅ニテ十四円、箱四ツ代四円廿銭	昭和三年二月廿九日払

図8-3 中山潔「心覚」昭和4～昭和7年 (中山家蔵)

賃三十五円で借家を借りていたこともあったからである。さらに、大正十三年(一九二四)一月一日になって、生玉町の借家から近くの上本町八丁目(現天王寺区)に家賃九十円の家を借り、家族全員がここに移り住んだ。当時、潔は恵我村の村会議員や学務委員などの公職にあったが、これらを辞し、以後、終戦まで別所の本家は番頭の松本重太郎が管理するようになった。

(4) 大正十三年六月：南岳が亡くなって四年が経っていたが、南岳が積奠の際に詠んだ聯句詩(譲りうけたものか、購入したものか判明しない)を井口古今堂で表装に出している。井口古今堂は船場の表具店で、当時の大阪の風雅を支えた一流の職人の店であった。中でも、三代目井口藤兵衛は、南岳とも親交を持ち、漢学や詩文を能くした。この時の表装代として十円八十銭を支払った。

(5) 大正十四年十一月二十三日：文政八年(一八二五)、東咳が現大阪市中心区淡路町に開いた泊園書院がこの年、開塾一〇〇年を迎えたので、当時、難波駅前(現中央区)にあつて、いろいろな催事に使われていた明月楼で祝典があつた。潔もこの宴に出席している。

大正時代のものは、この四件であり、あとは昭和四年(一九二九)から始まる。細かなことも多いので、すべてを列記することはできないが、私の関心に基づいて紹介する。

(6) 昭和四年一月七日～五年一月七日：「日記」によると、正月に潔の妻次子、長女孝、次女秀、三女邦は、南岳門下の書画家であつた吉宗耕英女史の年賀初釜に参加したり、四月には孝や秀は耕英に書画を師事している。同時期の三月には、耕英に絹本の「嵐山」の絵を揮毫してもらつたりして、耕英との繋がりが強い。揮毫の礼として三十五円を支払っている。耕英も上本町の潔宅をしばしば訪れていたようだ。この「嵐山」の絵を自宅近くの上本町九丁目・岡本眷欣堂に表装に出している。岡本眷欣堂のことを調べるため、昭和十四年(一九三九)発行の大阪市内電話帳を繰ってみると、岡本義弘の名で「表具・屏風・襖・額」とあつた。上本町に移ってから、潔はおもに岡本眷欣堂に表装を依頼したのである。

同じく「心覚」によると、耕英の「嵐山之図」の表装代として十七円を支払った。他にも、南岳の詩四幅の表具を岡本眷欣堂で表装を依頼し、表具代四幅で十四円、箱四つで四円二十銭を昭和三年二月二十九日に支払っている。

こうした表装とは別に、「心覚」には昭和五年(一九三〇)十月十九日に行われた生玉・齋延寺での黄鵠の七回忌の法事香料として九月十四日に三円、また同じく齋延寺で行われた昭和七年(一九三二)四月二日の南岳の十三回忌には十円を包んでいる。南岳十三回忌の一年前の昭和六年四月一日には、黄坡の口添えもあつたのだろうか、南岳の「印讓跋ノ謝礼」として、黄坡へ十円を渡している。

なお、昭和五年十月十九日に行われた黄鵠の七回忌祭での記念写真が中山家に残されていた(図9)。この時は、南岳夫人の仙(牧野氏)の五十年祭もあわせて行われた。写真の上にペーパーが付けられ、一人ひとりの名前が記されている。当時、藤澤家当主の章次郎(黄坡)が第二列目中央に座っている。その前の第一列には、右側から九番目に中山源次郎と結婚した黄鵠長女の雅子が座り、その四人目に吉宗耕英ら女性陣が写っている。最後列には左から四人目に中山潔が見え、反対側の右から二人目に黄

⑥春晴倚樓小箋（横幅）

年未詳（明治後半）、落款なし、箱入り（昭和二十年前後、藤澤黄坡の箱書きあり）

⑦雲圍富士峯（軸）

年未詳、落款あり、五言絶句

⑧真機葆得五律統本（軸）

年未詳、落款あり、五言律詩、箱入り（箱書きあり）

繁雑になるので、ひとつひとつ説明はしないが、最も古いものは明治三十八年（一九〇五）七月に、南岳が二十五歳の潔のために書いたものである。中国の故事をひき、「勤為無価之宝」、すなわち「勤め励むことは無上の値打ちのある宝である」と記し、続いて「忍是衆妙之門」、つまり「忍耐を守ることが多くの事を成しとげる一番大切なことである」と論じている。南岳が、若き門弟にこれから歩む道のりの処し方を示したのである。「乙巳」―明治三十八年の「孟秋」七月に書かれた句を潔は後世、教訓としたであろう。自ら、十一月に箱書きした上には「南岳先生聯句 双幅」、内には「明治三十八年十一月 中山潔記」、箱側面には「南岳先生勤忍聯句」と記して大切に保管したと思われる。

この「勤忍聯句」と対をなすと思われるのが、同じく明治三十八年立秋（八月八日ごろ）の三日後に書かれた「茶熟鳥啼聯句」である。ここには潔への為書きはないが、潔が箱書きと共に箱包紙に記した文言によって、潔に贈られ、いずれも同年十一月に中山家蔵として箱書きされたものと考えられる。書は「茶熟香酣有客到門可喜」「鳥啼花落無人亦自悠然」「七香齊言南岳恒」とある。箱書は、上に「南岳先生聯句 双幅」、内に「明治三十八年十一月 中山潔記」、側面に「南岳先生書 茶熟鳥啼聯句 双軸」とあり、この書を表装して箱を包んだ紙には「南岳先生勤忍聯句」と記している。

他にも、額にした七言絶句の「橘緑涼釀」は明治四十年（一九〇七）七月に書かれている。

大正期のものとしては、大正三年（一九一四）の軸にした七言絶句の「美人語学七絶」がある。「七十三翁南岳」の記もあり、南岳が七十三歳の



図10-①



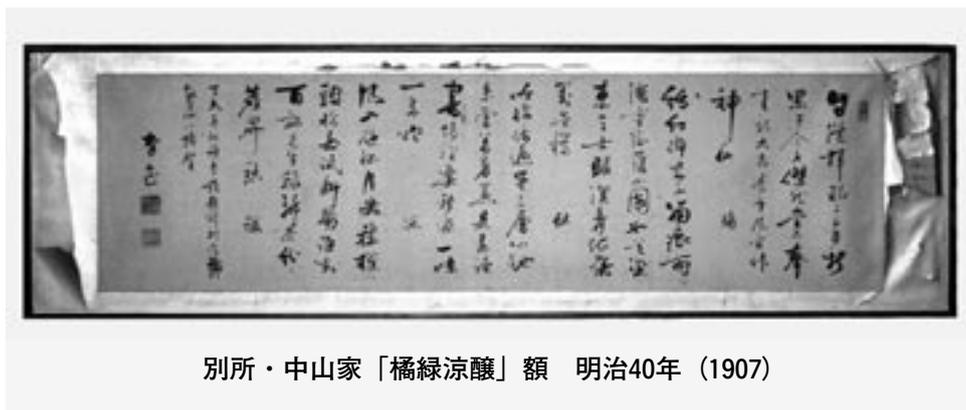
図10-②

勤為無価之宝 乙巳孟秋
忍是衆妙之門 為中山君 恒

（箱上書）「南岳先生聯句 双幅」
（箱内書）「明治三十八年十一月 中山潔記」
（箱側面）「南岳先生 勤忍聯句」

明治乙巳立秋節後三日
茶熟香酣有客到門可喜
鳥啼花落無人亦自悠然
七香齊言南岳恒

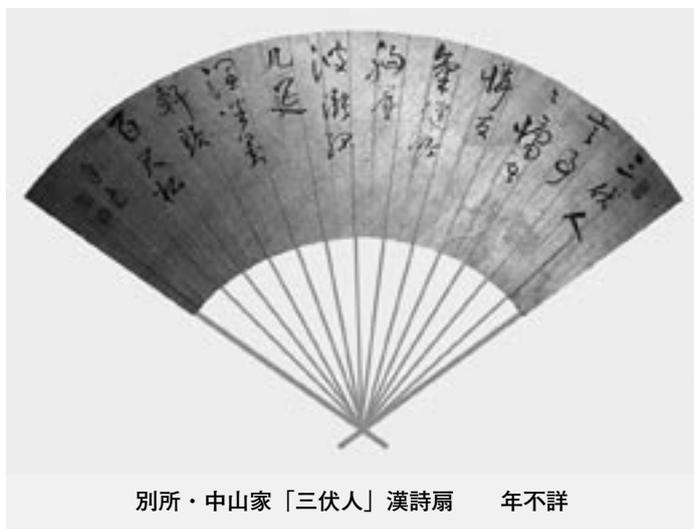
（箱上書）「南岳先生聯句 双幅」
（箱内書）「明治三十八年十一月 中山潔記」
（箱側面）「南岳先生書 茶熟鳥啼聯句 双軸」
（箱包紙）「南岳先生勤忍聯句」



別所・中山家「橘綠涼釀」額 明治40年（1907）

図10-③

自從拜謁二千年 新
 果于今御傑然 掌上奉
 來斯大吉 養吾風音作
 神仙 橘
 紛紅碎紫不留痕 雨
 浚重陰護小園 也咲染
 來高土眼 深青依舊
 對芳樽 綠
 吟樓倚遍第三層 心地
 未曾暑蒸 最是說
 書場程樂 新涼一味
 一青燈 涼
 風入庭松月滿樓 欄
 頭恰是試新斲 誰知
 百畝先生球 掃尺紛々
 塵界愁 釀
 丁未孟秋得五十絕題冠新浮節
 餘其四以博粲
 南岳



別所・中山家「三伏人」漢詩扇 年不詳

図10-⑤

三伏人
 言事
 々慵吾
 憐友
 筆健吟
 胸簾
 波瀾弥
 几筵
 潤坐對
 軒頭
 百尺松
 南岳



別所・中山家
 「美人語学七絶」軸
 大正3年（1914）

図10-④

為獨為黃語々新 舌諦洪處是可真好
 音只有篔簹扣 吐出文明世界春
 美人語学 七十三翁南岳
 （箱上書）「藤澤南岳先生書
 美人語学七絶」



〔箱上書〕「香翁先府君手書小箋軸」

〔箱内側〕「中山清處在泊園之日先君拉之臨咬萊社吟筵于河内南莊民命題曰

春晴倚樓清處年僅成童獨坐于隅忠君乃書殘雪詩餘誦之已卒業

乃又課松雪之詩于今既經四十五年頃日潔處得之筐底乃裝以藏于

忠余感于先君雨化之与潔處羹墻之情為記之云 昭和夏日 章誌」

〔箱包紙〕「藤澤南岳夫子春晴倚樓小箋橫幅」



図10-⑥ 「春晴倚樓小箋」と黄坡の箱書（年未詳、箱書は昭和20年前後）中山家蔵

春晴倚樓

限 齊韻

晚醉扶節過竹村 數家殘雪擁籬

根 風前有恨梅千点 沙上無人月一痕

鄂王墓上草離々 秋日荒涼石獸危 南渡

君臣輕社陵稷 中原父老望旌旗 英雄已

死嗟何及 天下中分不可支 莫向西湖

歌此曲 山光水色不堪悲

趙孟頫子昂

雲園富士峯 々色更薄澗 誰
 南海東西 米糞書未了
 南岳



別所・中山家
 「雲園富士峯」軸
 年不詳



別所・中山家
 「真機保得五律統本」軸
 年不詳

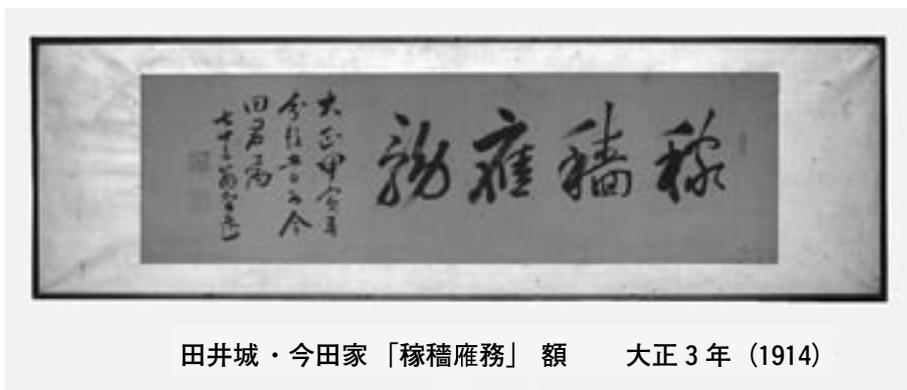
高中何所有 葆得是真機 舊典只良範
 前賢頭御睞 七香々不尽 三友々相依 獨
 峙風塵少 無教浩氣饑
 南岳恒

(箱上書)「藤澤南岳先生真機葆得五律統本」

図10-⑧

図10-⑦

時に書いたものである。実は、今回、松原市域の南岳関係の書を調査して
 気づいたことは、先の辻直太郎に為書きした「書架」の書や、後述する松
 原村田井城（現松原市田井城）の今田家の「稼穡雁務」（図11）がいずれ
 も南岳七十三歳の時のものであり、同時期に当地で揮毫したか、あるいは
 まとめて泊園書院で書いたものか興味を覚える。
 また、南岳の書を、後に黄坡が昭和二十年前後に実見した「春晴倚楼小
 箋」に箱書を記し、潔との思い出を書いている。箱上書には「香翁先府君
 手書小箋軸」とし、箱内側には潔の雅号である「中山清處」を始め、「在
 泊園之日先君拉之臨咬菜社吟筵于
 河内南莊民」と続け、「昭和夏日
 章誌」で結んでいる。この箱を
 包んだ箱包紙には、「藤澤南岳夫
 子春晴倚楼小箋横幅」とする。
 一方、南岳七十三歳の書とし
 て、別所から西二キロほどの松原
 村田井城の庄屋であった今田家
 も一点残されている。それには、
 「稼穡雁務」「大正甲寅春分後五日
 為今田君囑」「七十三翁南岳」と
 ある。大正三年、当主の幾三郎の
 求めに応じて為書きし、「稼穡」
 つまり農業の務めに精を出しなさ
 いと励ましている。当時の今田家
 と中山家、あるいは辻家との結び
 つきはよくわからない。ただし、
 偶然かもしれないが、この時期、
 幾三郎の兄である慶太郎が南岳の
 自宅のあった平野町（現大阪市中
 央区）の塩田家へ養子に入ってい
 たことから、慶太郎ルートで南岳



田井城・今田家 「稼穡雁務」 額 大正3年 (1914)

図11

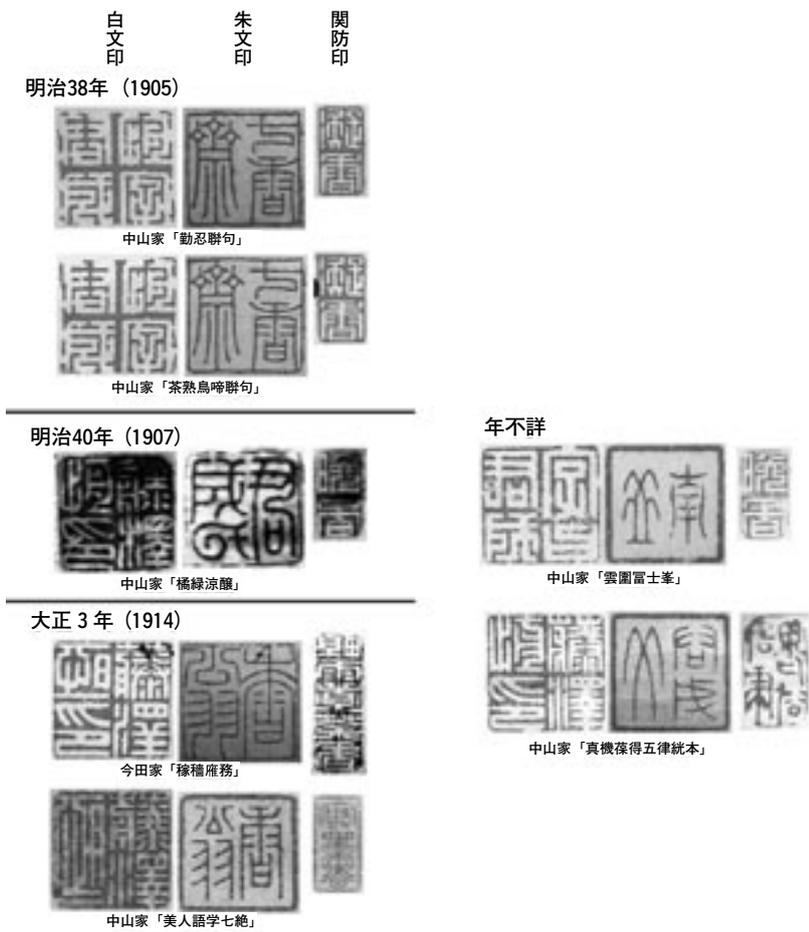


図12 南岳の白文印・朱文印・関防印

に揮毫を依頼した可能性もあるだろう。

これら九点について、私は漢学に素養のある徒ではないが、一応、読みを下しておいた。読みに誤りもあるかとも思われるので、ご教示いただければ幸いである。

同時に、南岳の白文印・朱文印・関防印もまとめて示しておく(図12)。それぞれ順に、「勤忍聯句」「茶熟鳥啼聯句」では「恒字君成」「七香齋」「疑香」。「橘綠涼釀」では「藤澤恒印」「君成氏」「晚香」。「美人語学七絶」では「藤澤恒」「香翁」「宝墨香」。「雲圍富士峯」では「字曰君成」「南岳」「晚香」。「真機葆得五律統本」では「藤澤恒印」「君成父」(関防印は未読)。「稼穡雁務」では「藤澤恒印」「香翁」(関防印は未読)とある。こうした

各落款による使いわけは時期によるのか、作品によるのか、あるいは贈る相手によるのかなど、今後の研究課題である。

七. 松原市域に残る泊園書院の碑文

(一) 南岳の碑文

ここでは、現松原市域に残る南岳・黄鵠・黄坡が記した碑文を紹介する。中山潔がまだ二十代のころの明治三十六年から四十年ごろの揮毫をした書は、先に見たように中山家に残っているものの、碑文はいずれも大正時代に入ってからである。先述のように、道明寺の藤原章子墓や柏原築留の深瀬郡長碑が刻された明治二十一年(一八八八)、植松の長崎桂齋墓の明治三十一年(一八九八)、同じく万願寺の久保田真吾碑の明治四十年(一九〇七)などに比べると、松原地域の碑文はそれらより遅れている。南岳が七十歳をこえた晩年に造られたものである。反対にそれは、潔が青年から壮年となり、いつそう地域において重責を担う立場になったからであろう。潔に為書きされた書は、あくまで潔個人に揮毫されたものであったが、地域の人々が協賛・出資して建碑された碑文は公的な性格を持っていた。

まず、大正五年(一九一六)三月十五日に建てられた南河内郡丹南村丹南(現松原市丹南)の「松川長右衛門碑」がある(図13)。元禄七年(二六九四)、当時の丹南郡丹南村の庄屋であった長右衛門は私財をなげうって、丹北郡や丹南郡の水源であった狭山池(大阪狭山市)を改修し、下流域の田畑に用水を潤わせたという。松川家は、丹南藩主高木氏の陣屋に南接しており、郷士身分でもあった。中高野街道沿いに建つ碑の表面に「松川長右衛門碑」「藤澤南岳書」、背面に「大正□□月十五日建之」「大字丹南」とある。年月が欠けているが、他史料から大正五年三月であることがわかっていいる。南岳は顕彰される人物の撰を記することが多いが、同碑にはそれが無いのが惜しまれる。丹南の人々によって建てられた同碑の前で、現在も何代にもわたって、長右衛門の命日の三月十五日、碑に参り、その遺徳を偲んでいる。

(背面)

大正〇〇〇〇月十五日建之
大字丹南

(正面)

松川長右衛門碑
藤澤南岳書



図13 松川長右衛門碑 (松原市丹南)

二つ目は城連寺・池内共同墓地(現松原市天美北)に見る「浦野君考妣墓誌銘」である(図14)。同碑は中河内郡天美村池内(現天美東)の元庄屋家の浦野澄夫が大正七年(一九一八)十二月、母志希の徳を讃え、家の事歴を記して建立した。岸和田藩士横山氏の出である志希は、明治十六年(一八八三)に四十歳で亡くなっている。のち、夫の八三郎が大正七年十月に八十四歳で没したことから、子の澄夫が南岳に撰文を頼んだのである。正面・左側面に銘がびっしりと書かれ、「南岳 藤澤恒撰」と記した。恒が本名である。右側面には「釋 誠清 尼妙教 瑩域」とあり、背面には「大正七年十二月 男不肖澄夫建之」と記している。

南岳は左側面に「一家余深感喜誌而銘之銘曰」とあるように、「浦野家の祖を慕い敬う気持ちに深く感じいり、喜んで銘をしたためる」と述べている。まさに「浦野君考妣墓誌銘」にふさわしい撰文であった。

澄夫は、のち大正十四年(一九二五)十二月、昭和四年(一九二九)四月まで天美村村長を務めた。これより先、明治二十九年(一八九六)中河内や南河内を営業エリアとして開業した地元の更池銀行(中河内郡布忍村更池、現松原市南新町が本店)の第二位株主として経済界でも活躍した人物であった。中山潔もこの更池銀行の株主で、三宅には三宅支店があった。同じ庄屋の家柄で、更池銀行の経営を担った潔と澄夫の結びつきは深かったであろう。ちなみに、先の岡田正英も寿一郎の本名で、明治二十七年、岡に岡田銀行を開き、のち廃業後も、更池銀行の第三位株主として、その運営を支えたのである。寿一郎の子、伊左衛門は更池銀行の頭取にまでなっている。

三つ目は、中山家の西隣に鎮座する別所の氏神である熱田神社の社号標石である(図15)。正面に「熱田神社」、右側面に「大正八年己未五月 正五位 藤澤南岳書」、背面に「奉獻 玉垣 世話人中」とあり、地元別所の人々二十五人が津村竹松を筆頭に列記されている。同社号標石は、いうまでもなく中山潔が南岳に依頼したと思われるが、不思議なことに潔の名前は世話人の中に含まれていない。一般の世話人を超越した存在であったのだろうか。ここでは、大正天皇の即位に当たり叙せられた「正五位」の位階を明記した南岳であったが、翌大正九年(一九二〇)一月、七十九歳

(左側面)

實君祖父安政三年以老讓家八次郎諱廣泰承之性恬淡嗜風雅文
 久三年病歿實君父也君繼述二世之志而當此擾雜之日非拔群之
 力不能撫寧也其才力可知耳大正七年十月三日病歿享年八十四
 橫山氏明治十六年一月七日病歿享年四十澄夫聿修考妣德業秉
 尋之美來于一家余深感喜誌而銘之銘曰

祖德煥發 澤渥舊孫 明倫情篤 世顧厥恩
 一片青石 不獨示源 天美人美 道派永敷

(正面)

(家紋)

浦野君考妣墓誌銘 南岳 藤澤恒撰

中河內郡天美邨人浦野澄夫來乞山考妣墓誌曰祖考之德不可泯
 滅子孫承流不可便忘祖德幸得高文勤以顯為受譜接之考八三郎
 君諱由清文久三年癸亥卒家為里正時幕政解弛物情騷然君夙夜
 勉勵盡力于公職而內保父祖遺業以不辱祖先為念妣橫山氏名
 繁岸和田藩士佐治右衛門賀信之長女謙讓柔順勤苦整理忘其家
 格高壘能執賤務孜孜不倦使其夫無內顧之憂二人同心公私齊整
 村民仰敬名馨倍舊矣蓋浦野氏世以名族職為里正家道中衰八左
 衛門諱正則者決然奮起理產業以總里正煥發治蹟稱為中興之祖



圖14 浦野君考妣墓誌銘 (松原市天美北)

(背面)

大正七年十二月 男不肖澄夫建之

(右側面)

釋 誠 清 瑩 域
 尼 妙 教



図15 熱田神社社号標石 (松原市別所)

(正面)
熱
田
神
社

(右側面)
大正八年己未五月 正五位 藤澤南岳書

(背面)
献奉
玉垣
中 人 話 世
津村竹松 野津亀吉 長澤辰蔵
山野新三郎 小池庄太郎 辻野留吉
山野吉次郎 山道庄吉 吉田朝太郎
石田吉治郎 山野庄治郎 三谷鹿太郎
津村新次郎 山野竹造 野澤芳蔵
長澤庄吉 津村新七 山野徳松
山道辰吉 長澤伊三郎 津村順治郎
野口吉造 山道兵造
辻野文吉 石田留蔵

で亡くなったのである。南岳の死と軌を一にして潔も大正九年から大阪天王寺の生玉に借家を借り、同十三年以後は別所の本宅を番頭にまかせ、上本町に移っていったのである。

なお、南岳は社号標石として、恵我村に東接する南河内郡小山村津堂（現藤井寺市津堂）の津堂城山古墳に鎮座する八幡神社碑も大正元年（一九二二）に書いている。四世紀末の巨大前方後円墳である同墳の堅穴式石室の蓋石を利用して、正面に「八幡神社旧址」、背面に「大正元年壬子桂月」「南岳藤澤恒書」とある。同社は、潔とは泊園書院塾生として親しく交わっていた津堂の石田氏の氏神であったことから、南岳が記したのであろう。

(二) 黄鵠の碑文

南岳の死後、泊園書院を継いだ黄鵠が大正十二年（一九二三）六月に撰したものに、保田佐久三の像がある。保田家も江戸時代、丹北郡阿保村（のち、中河内郡松原村阿保、現松原市阿保）の庄屋筋であった。現在、阿保五丁目の保田佐久男氏宅にその銅像が建つ（図16）。正面台石に「保田佐久三君像 子爵加藤高明 書」とあり、向かって右側に佐久三の事績が「黄鵠 藤澤元撰」として記されている。左側には「大正十二年六月上旬建之」、「発企人」として、のちの松原町長となる浅田義守など、松原村の人々の名が二十七名刻まれている。裏側には原形制作の黒岩淡哉、銅像制作の高尾定七の名が見られる。

佐久三は明治二十二年（一八八九）の松原村発足とともに初代收入役となり、同三十六年には第三代の助役に就任した。同四十年まで助役を務めた後、同四十二年には二代松原村長に就き、大正十一年まで村政を担ったのである。その間、佐久三は明治四十年から大正八年まで、大阪府議會議員にもなった。とりわけ、明治四十四年から大正四年まで、府会郡部会副議長として、中河内郡を代表する政治家として活躍した。同じ中河内出身で、府議會議員から貴族院議員となった久保田真吾と交わったことはいうまでもない。

同銅像では、のち、大正十三年に内閣総理大臣となる加藤高明が揮毫し



図16 保田佐久三像（松原市阿保）

（右側面）

是為保田佐久三君像中河
 內郡松原村民所胥議而建
 也君其村人關興村治者三
 十餘年為村長十有四年三
 選為府會議員出參府議入
 理村政蹇々不倦經紀有方
 一村緝睦歷任府會郡部會
 副議長府參事會員郡之南
 部村長會長等地方公職無
 不兼也君為人真卒不飾秉
 志公忠為人所親信大正十
 一年十月辭村長也村民德
 其匪躬多年之勞所以有此
 舉也幹事者介人請余記乃
 係以贊

其績在目 具瞻誰欺
 其惠在人 廣被何疑
 公義維孚 榮名自隨
 不朽者德 百年長垂

黃鶴 藤澤元譔

（正面）

保田佐久三君像

子爵加藤高明書

（左側面）

發企人

石橋定吉 土師徳太郎
 西本市松 岡田平治
 織谷楠太郎 田中安松
 田中岩吉 中野龜造
 中川竹松 村尾菊次郎
 山口勝次郎 藪中房吉
 泰松永市郎 山間岩吉
 松野龜吉 前田丑松
 松野音次郎 松川為三郎
 福島義太郎 出島房次郎
 淺田吉次郎 淺田義守
 岸本甚藏 芝池留造
 菱田岩松 杉中寅吉
 杉本清治 田中清一郎
 大正十二年六月上旬建之

ていることも特筆される。また、関西彫塑界の親ともいべき彫刻家の黒岩淡哉が制作したことも文化遺産として貴重であろう。淡哉は東京美術学校教員として朝倉文夫や高村光太郎を指導した。大阪へ移った後、四天王寺の普賢菩薩像、四條畷の小楠公像、京都山科の蓮如上人像などを造っている。一方、高尾定七は大阪市東区瓦町四丁目（現中央区）で鑄造を行った工人で、京都・北野天満宮の銅造狛犬などに関わった。佐久三は慶応二年（一八六六）生まれで、元治元年（一八六四）生まれの辻直太郎と同年代であり、隣村の庄屋家ということもあり、両家の交流は密であった。甥の保田俊一郎（初代松原市長）に至っては、直太郎が明治三十二年（一八九九）のわずか一年たらずとはいえ、三宅村村長を務めていたこともあって、彼に私淑して、その感化を非常に受けたという。直太郎が七十六歳で亡くなった昭和十四年（一九三九）の翌十五年、佐久三も七十七歳でこの世を去った。

なお、黄鵠は像完成後の一年後の大正十三年（一九二四）、五十一歳で亡くなっている。

（三）黄坡と原田隆の碑文

黄坡（章次郎）が記したのは、現在の三宅・別所霊園（三宅東三丁目）に建てられている辻直太郎墓石である。墓石は、正面に「正道院直種日徳居士 直道院妙種日正大姉」、右側面に「昭和九年三月建之」、左側面に「従七位勲六等功五級藤澤章次郎書」とある（図17）。直太郎夫婦の戒名を黄坡（章次郎）が昭和九年（一九三四）に書いたのである。ただし、この墓は妻のはるが昭和七年（一九三二）に亡くなったことを受け、直太郎も生前墓として祀られたものである。建立者は、直太郎の長男有之祐と次男岱之介（白井家へ養子）であった。

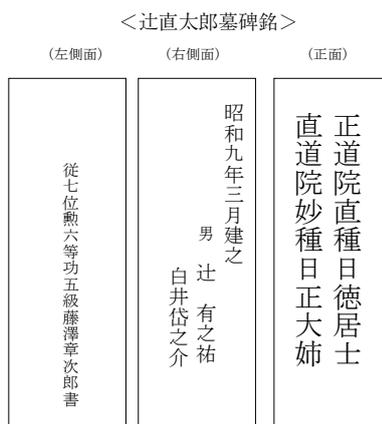
こうした生前墓は、儒教の感化によるものであるともいわれている。恵我村の東隣に丹北郡小山村（のち南河内郡、現藤井寺市小山）の共同墓地があるが、この小山墓地に文人の日暮重興の墓がある。重興は寛永年間の前句付の作者として有名だが、同墓は生前に「寿蔵」と記され、墓石上部には儒学崇拜の「大極図紋」が刻されている。先の岡田正英もこの重興の



図17-1 辻直太郎墓（松原市三宅東）



図17-2 「藤澤章次郎書」



<辻直太郎父墓碑銘>
(左側面) (右側面) (正面)

從五位勲五等原田隆書	男 辻直太郎建之 明治四十五年	壽光院道寂
------------	--------------------	-------



図18-2 「辻彦太郎墓」右側面の「辻直太郎建之」



図18-1 原田隆書の辻彦太郎墓（松原市三宅東）

影響を強く受けた一人であった。直太郎の儒学への傾倒がよくわかる。

この直太郎夫妻墓の側に、直太郎の父、彦太郎の墓がある。彦太郎は大正三年（一九一四）に亡くなるが、その四年前の明治四十五年（一九一二）南岳と学を同じくした原田隆が直太郎の求めに応じて、やはり生前墓として「寿光院道寂」の戒名を書いた。右側面には「明治四十五年 男辻直太郎建之」、左側面に「從五位勲五等原田隆書」と刻している（図18）。

原田は、通信省修技校校長などを歴任したが、明治十二年（一八七九）に藤本鉄石十七回忌茶筵図録を編集するなど、風雅の世界に生きた人物でもあった。また、中山潔との交友も深く、「西疇」の号をもって茶器やいちじく箸などを中山家のために焼いたり、削ったりして贈っている。今も、中山家にこれら「西疇」銘の遺品が数多く残っている。

八・最後に

以上の揮毫や碑文を通して、積奠が土師神社で行われるようになった明治三十六年（一九〇三）前後から、現松原地域の別所や三宅を中心に南岳との結びつきが見られるようになったことがわかる。それは、ひとえに中山潔や辻直太郎に負っていたのである。

現在、土師神社で初めて積奠を行うに至る直前の南岳から社司南坊城良興や藤井寺村岡の岡田寿一郎（正英）、小山村の小泉八郎あての何通かの書簡が南坊城家に残されている。そのうち、積奠が行われた三月三十日の前々日の三月二十八日の良興あての書簡には、大阪市内在住で財的に協賛した十名が列記されている。さらに、その後に地方の協賛者として、久保田真吾、中山潔、柏元増次郎、高田清三郎、松永新三郎、松村達三郎、東尾平太郎、小泉七郎、上田逸郎、岡田寿一郎の大阪中南部在住の十名が見られる。南岳が明治四十年（一九〇七）に碑文を撰した万願寺の久保田真吾のあとに中山潔の名が見え、積奠に財的に援助したことがわかる。潔、このとき二十三歳であった。前掲（図4）の南岳と黄鵠の横に座って写された泊園書院関係の集合写真と同時期である。中河内・南河内の有力者に伍して、若くして南岳の薫陶を得たことは、潔にとってかけがえのない財

産になったに違いない。

小文から、これまで紹介されてきた大阪中南部の現八尾・柏原・藤井寺・羽曳野市域以外に、中山家の資料を中心に明らかにされた現松原市域の揮毫や碑文が人々の目に触れることができれば幸いである。

今回の文献・金石文・書などの調査を通じて、大阪中南部の各村々の豪農・名望家たちはバラバラで行動していたのではなく、ネットワークをつくって、地域社会の政治・経済・文化などを担っていた実態が少しずつ明らかになった。泊園書院は単なる漢学塾ではなく、地域社会の活動を結びつけ、文化遺産を残した根幹として存在したといってもいいすぎではないだろう。

最後になったが、資料提供などにあたって別所の中山菊子・中山経正・中山智恵、三宅の辻嘉之輔、田井城の今田忠弘、道明寺天満宮の南坊城充興・南坊城光興、藤井寺市大井の白江久子、同市岡の岡田積、松原市教育委員会の岡本武司・室山京子、藤井寺市教育委員会の天野末喜・山田幸弘・吉岡美和、柏原市教育委員会の石田成年、元八尾市立歴史民俗資料館長の棚橋利光、佛敎大学の原田敬一、大阪市史編纂所の堀田暁生、市川市の柴田重信ら各氏に大変お世話になった。記してお礼を申し上げる。

注

- (1) 岡村の岡田正英(松窓、寿一郎)については、正英の孫である岡田積氏蔵の『松窓詩鈔』(第一卷上下、明治二十五年)および没後七回忌に子の伊左衛門がまとめた『松窓遺稿』(昭和八年)によった。また、藤井寺共同墓地(藤井寺市藤井寺)に祀られている「岡田氏塋域碑」(明治二十年)の土屋弘撰文と「松窓居士墓」の藤澤黄坡撰文・書の調査による。
- (2) 中山家については、中山潔の五女であり、泊園書院の吉宗耕英や山下兵太郎に師事した中山菊子氏がまとめられた中山家記録および「中山家過去帳」によった。これらをもとに、拙稿「国の登録文化財となった中山家住宅」(松原市役所「広報松原歴史ウォーク」100、平成十七年)で概略を述べた。
- (3) 辻家については「辻家過去帳」をもとに調査をした。同家や浦野家についても先掲拙稿「広報松原歴史ウォーク」123(平成十八年)で触れた。

(4) 白江家については、白江久子氏蔵の「諸事心得日記」(幕末の弘化四年一月一日を最初とし、明治三十七年前後まで太平治・広太郎・琢三の各当主がまとめている)をもとに記述した。

(5) 中山源次郎については、中山菊子氏のご教示以外に、『職員録』(内閣官報局↓印刷局↓内閣印刷局)掲載の植民地官庁の部分抽出したものを参考にした。これは『旧植民地人事総覧関東州編』(日本図書センター、平成九年)にまとめられている。同項については佛敎大学教授原田敬一氏にご教示いただいた。

(6) 昭和十四年大阪市内電話帳は、大阪市立中央図書館蔵を用いた。同項は大阪市史編纂所長の堀田暁生氏にご教示いただいた。

(7) 『大阪春秋』第三十五号(大阪春秋社、昭和五十八年)の中に掲載された小泉豊「道明寺天満宮釈奠会」による。

* その他、本文中にも触れたように『藤井寺市史』『羽曳野市史』『松原市史』を参考にした。